＜授業実践７＞「論理国語」読むこと

１　単元名

自らの考えを他者に伝えられるように、論文を読もう

２　指導目標

(1) 単元の目標

・言葉には、言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解することができる。(〔知識及び技能〕(1)のア)

・関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めることができる。(〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ「読むこと」(1)のオ)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(「学びに向かう力、人間性等」)

(2) 言語活動

ア　言語活動

学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み、自分の考えを論述したり発表したりする活動。(〔思考力、判断、表現力等〕Ｂ「読むこと」(2)のウを参考)

具体的には、(ア) 自分が担当した文章についてクラスメイトに発表する活動

(イ) クラスメイトの発表や教科書本文を参考にして、意見文をまとめる活動

イ　言語活動のねらい

評論文を正しく読み取り、読み取った内容を他者に伝える活動を通じて、「恣意的」や「分節」といった抽象的な言葉の正しい使い方や、論理の展開を的確に捉える力を身に付けさせたい。また自分が読み取った内容を他者に伝えるという課題設定により、自ら問題意識をもって主体的に取り組む態度も育成できると期待される。

(3) 教材

ア　教材

内田樹「言葉は『ものの名前』ではない」(『新編論理国語』東京書籍)

参考文献①：丸山圭三郎「言葉とは何か」(『言葉とは何か』(ちくま学芸文庫) より抜粋)

参考文献②：鈴木孝夫「ものとことば」(『ことばと文化』(岩波新書) より抜粋)

参考文献③：田中克彦「言語の相対性と普遍性」(『言語学とは何か』(岩波新書) より抜粋)

イ　教材観

教科書本文は、現代思想の導入として、ソシュール言語学の考え方を紹介する文章である。抽象的な言葉を多く用いた論理的な文章である一方、具体例も豊富で、学術的な学習への入り口として適切な難易度である。本文に関連する複数の参考文献に触れ、比較させることで、抽象的な内容をより深く理解できるような構成とした。

(4) 学習者観

学習態度は真面目で、落ち着いて取り組むことができるものの、基本的な知識不足が否めず、また漢字の読み書きは苦手である生徒が多い。特に抽象的な用語は、本文中の言葉を機械的に繰り返すことはできるものの、他の場面で応用を利かせることが難しい。そのため、発表や意見文としてアウトプット

させる中で、抽象語と具体例をつなげて考える習慣を身に付けさせたい。少人数である強みを生かして、日頃から定期的に人前で発言する機会を設けているため、発表に対する抵抗感は薄いと考えられる。

(5) 主体的・対話的で深い学びの工夫

生徒ごとに異なる参考文献を読ませることで、自分が責任をもって他の生徒に内容を伝えなければならない状況を生みだし、自ら問題意識をもって取り組めるように課題を設定する（主体的）。

相互に参考文献の内容についてスライド発表を行い、意見交換する時間を設ける（対話的）。

参考文献に関する発表後に、全員で教科書本文を読み、読み取った内容について意見文を書く。その際に参考文献に記載された内容を参考にさせることで、「言語」という抽象的な内容について、複数の観点から考えさせる（深い学び）。

3　観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
言葉には、言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解している。	「読むこと」において、関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めている。	本文の内容をまとめる活動を通して、粘り強く課題文に取り組み、発表をすることで、自ら解釈を深めようとしている。

(2) 評価方法

ア　知識・技能

ワークシート及びスライド発表の内容によって評価する。

＊発表の巧拙ではなく、抽象的な語句の説明や解釈の内容について評価する。

	評価Ａ	評価Ｂ	評価Ｃ
言葉には、言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解している。	「恣意性」「分節」といった複数のキーワードを中心に、本文に即して理解しているだけでなく、聞き手の理解を促すような説明を加えている。	「恣意性」「分節」といった複数のキーワードを中心に、本文に即して理解している。	「恣意性」「分節」といった複数のキーワードを中心に、理解している。

イ　思考・判断・表現（読むこと）

意見文の内容によって評価する。

＊文章の巧拙ではなく、抽象的な語句の説明や、解釈の内容について評価をする。

	評価Ａ	評価Ｂ	評価Ｃ
関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めている。	言語について教科書や参考文献を正しく読み取り、複数の視点から自分なりの解釈を加えている。	言語について教科書や参考文献を正しく読み取り、自分なりの解釈を加えている。	言語について教科書や参考文献を読み、自分なりに考えている。

ウ　主体的に学習に取り組む態度

ワークシートの記述及び意見文の内容によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
他者の理解を促すために、下準備を十全に行い、説明しようとしている（α）。	発表の下準備が十分であり、本文の内容を説明するだけでなく、その表現に工夫しようとしている。	発表の下準備が十分であり、本文の内容を最後まで説明しようとしている。	発表の準備を行い、自分が理解できた内容について、説明を行おうとしている。
複数の文章を読んだり、他者の発表や意見を聞いたりすることで、自分の考えを相対化しようとしている（β）。	複数の文章を読むだけでなく、他者の発表や意見を取り入れることで、自分の考えを相対化しようとしている。	複数の文章を読み、他者の発表や意見を聞くことで、自分の考えを相対化しようとしている。	複数の文章を読み、他者の発表や意見を聞くことで、自分の考えを深めようとしている。

※　α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

４　単元の指導計画（配当７時間）

次（時間）	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点 ＊生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点 □点検･確認 ■分析 ＊「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次（3時間）	・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・参考文献を読む。 ・参考文献を基に発表用スライドを作成する。 ・発表用の資料やメモを用意する。	・本単元の目標は「読むこと」であることを明確に説明する。 ・担当ごとに異なる参考文献を読んでいることを意識させる。 ・参考文献の内容が、未読の人にも伝わるような表現を工夫させる。 ・発表時に未読の生徒から質問があっても答えられるように準備する。 ・文献の読解だけでなく、それに対する自分の意見も最後に述べるように指導する。 ＊チェックシートを用いて、不足点がないかを確認させる。 ＊必要に応じて、辞書や国語便覧を使うように促す。	◇（知）（態） □「行動の観察」（机間指導） ＊内容をまとめるためのキーワードを示す。 ＊意味段落に分けて、段落ごとに内容を整理するように助言する。

第2次（2時間）	・自分が読んだ参考文献の内容を、順番に発表する。 ・聞き手は発表者に対して質問をする。	・目的は発表そのものではなく、全員が全ての参考文献について一定の理解をもつことであると意識させる。 ・発表者には自分が担当した文章の音読から始めるように指導する。 ・聞き手には、自分が担当した文献と発表者の担当した文献の共通点や相違点を意識させる。	◇（知）（態） ■「行動の分析」（発表並びに質疑応答） ■「記述の分析」（スライド発表及びワークシート）
第3次（2時間）	・教科書本文を読む。 ・単元全体を振り返り、「言語とはどういうものか」というテーマで意見文を作成する。 ・本文の理解について振り返りシートを記入する。	・これまでの参考文献を基に、それらとの共通点や相違点を意識させる。 ・「恣意性」「分節」といったキーワードを意識させる。 ・教科書本文の題の意味や、参考文献の内容について触れるように意識させる。 ・「読むこと」の単元であるため、発表や意見文に対する振り返りではなく、内容を理解するためにどのようなことに注意したかに意識を向けるように助言する。	◇（思）（態） ■「記述の分析」（意見文）

5　本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文について、自分が読み取った内容、考えた内容について、スライドを用いて他者に伝達する。

(2) 本時の具体的な評価規準

・学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた文章から自ら理解した内容について「恣意性」「分節」といったキーワードを用いて説明することができている。

・読み取った内容に基づき、自分が考えた内容を、本文の表現と対応させながら述べることができている。

（3）本時（全７時間中の４時間目）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入（５分）	・本時の目標、内容を確認する。	①前回までの確認、この単元の最終目標を再確認する。	①・最終目標が、教科書本文の内容を適切に読み取り、意見文を書くことにあることを確認する。 ・発表時における聞き手の役割を確認する。
展開（40分）	・参考文献ごとに発表を行う。	②スライドを用いて、本文の内容について説明する。 ③聞き手が本文の内容や発表について質問をする。 ＊②～③について、２グループ目、３グループ目も実施する。	②聞き手の様子を見て説明するように指導する。 ③一つの発表に対して、必ず一つ以上は質問を考えさせる。指導者も質問する。 ■（知）について、発表のスライドやワークシートによりルーブリックを用いて評価する。 ■（態）について、発表や質疑応答の様子から、ルーブリックにより評価する。
終結（５分）	・本時の振り返りをする。	④必要な内容をまとめる。	④最終目標を再確認して、大切な内容をノートに記入し、記録として控えておくように指導する。

６　研究の実際と考察

（1）事前準備、発表の実際

本研究の対象となったクラスでは、日々の授業の中で、「デイリートレーニング」と称した語彙力を身に付けるための学習を行っている。その学習の中で、生徒は他の生徒の前に立ち、抽象的な語彙を説明するという練習を積み重ねている。しかし、「イデオロギー」「主体性」といった抽象的な言葉を、単独で調べて発表をするという活動と、本文を読み解きながら理解するという活動とでは、その難易度に大きな開きがあった。結果、一つ一つの語句について丁寧な意味調べを行うことになり、発表の準備は予定よりも大幅に時間がかかることになってしまった。

一方で、読解についてはおおむね良好であり、自分なりに段落分けをして、説明を加えることができていた。手が止まってしまった場合も、「ここからここまで読んでごらん」「ここと同じ内容は、どこまで続いているかを考えて」と助言をすることで、取り組むことができた。

ひととおりの読解が終わったところで、作成したワークシートを参考にして、発表用スライドを作成した。今回の単元はあくまで「読むこと」の指導であるため、スライドや発表の巧拙は問わない旨を伝

え、ワークシートの内容を用いることができるテンプレートも用意した。Teams で共有しながら準備を進めることで時間の削減を図った。

発表については、準備したものを読み上げる生徒が多かったものの、時折、原稿にはない表現を加えて説明する姿も見られた。また聞き手側には必ず一つは質問をするように指示をしていたこともあり、質疑応答もスムーズに進行することができた。ただ、やはり生徒の質問は全体の内容からするとささいな質問（個人的に理解できなかった語句、表現）に終始していた。自分の文章と関連付けた質問ができると、より理解が深まると思うので、そのような質問ができる工夫が必要であったと思う。また、授業者は、知識の確認という意味もこめて、語句や内容に関する基本的な質問をするように心がけたが、「分からない」と述べることはなく、自分なりの言葉で受け答えしようとしていた。この質疑応答の内容も含めて、「知識・技能」の評価をしている。

なお、内容の読解に関して、明らかに誤解のある箇所については、発表が終わった後で、授業者による補足、訂正をすることで、理解の統一を図った。

(2) 知識・技能

抽象的な内容を取り扱う本文を読み進める場合、頻出する抽象語への適切な理解が重要となる。生徒に本文読解のキーワードを挙げさせ、その説明をさせることで、抽象語の理解度を測った。

実際に生徒が書いたキーワードの説明を中心に、評価について考えてみたい。

まずＣ評価作品を載せる（なお、引用する生徒作品は誤字も含めてそのまま掲載している）。

Ⅰ　恣意的…思いつくままにふるまう様子。自分勝手な様子。自分の気が向くままに都合よくふるまうさま。物事の筋が通る必然性がないさま。
　　虚構の文節…嘘八百で組み立てられた文字の一区切り。

この生徒は、挙げたキーワードについての理解が辞書的な定義のままになっており、本文の内容に即した理解となっていない。また、「分節」という言葉も「文節」と取り違えており、結果として説明も誤ったものになっている。本文の内容を説明するスライドでは「混沌とした連続的で切れ目のない素材の世界に人間にとって有意義と思われる方法で虚構の分節を与えそして分類する働きを担っている」と正しい内容を抜き出すことができていたものの、語義の理解が十分でないと判断し、Ｃとした。

次にＢ評価作品を載せる（なお、引用する生徒作品は誤字も含めてそのまま掲載している）。

Ⅱ　恣意性…①メという単語はメというものと目という音から出来ている。
　　②音声と意味が結びついたものだけでなく、意味だけの分け方も恣意性である。
　　社会的事実…選択の余地がなくただ受け入れないと生存が難しくなるというシステムの中で生まれるという事実。

この生徒は、「恣意性」について、本文の内容から二つの意味を読み取れていることが分かる。辞書的な説明に終始せず、本文に即した理解になっている。「①メという単語はメというものと目という音から出来ている」の部分は、「目というものとメという音」が正しい表現だと思われるが、「音声と意味が結びついたものだけでなく」という部分は、単純な抜き出しではなく、本文を理解した上でないと出てこない表現である。また「社会的事実」という言葉についても、キーワードの説明としては日本語としてやや不自然なものになっているものの、スライド発表の中では「個人がただ受け入れるしかない社会

のシステムを社会的事実と呼ぶ」と説明できていた。表現としては不十分な箇所はあるものの、読み取りとしては整合性が取れていると判断し、Ｂとした。

最後にＡ評価作品を載せる（なお引用する生徒作品は誤字も含めてそのまま掲載している）。

Ⅲ　第一の恣意性…記号内部の文字や音声とイメージや概念の関係において見いだされるもの。
　　第二の恣意性…分節の仕方そのものに見出だされる非自然性（歴史・社会性）のこと。言語体系内の記号内同士の横の関係に見出だされるもの。

この生徒は本文中に「第一の恣意性」と「第二の恣意性」という言葉そのものが出てくる丸山の文章を担当しているが、それぞれの内容について適切な説明を読み取ることができている。このうち第一の恣意性である「文字や音声とイメージや概念の関係」という表現は、単純な抜き出しではなく、本文の内容を分かりやすく整理した内容になっている。また丸山が「言語にみられる必然性は、いわば社会制度のもつ強制力という意味での必然性」だと述べる内容が、田中の文章では「社会的事実」という言葉で表現されていることにも気付くことができていた。自分の担当した文章だけでなく、他の生徒が担当した文章と関連付けながら説明をすることができていたため、十分な理解ができていると判断し、Ａとした。

(3) 思考・判断・表現

スライド発表が終わり、３種類の参考文献について一定の理解を得たところで、教科書本文の読解と意見文の記述に移った。意見文を書くにあたり、これまでの発表を振り返り、キーワードの確認を行うとともに、適切な引用の形について理解を促した。また筆が進まない生徒には積極的に声を掛け、必要に応じて参考文献を読み直すように指示をした。今回は「読むこと」の指導であるため、生徒の書いた意見文の中に、どれだけ読み取りの内容が反映されているかに重点を置いて評価を行った。

まずＣ評価作品を載せる（なお引用する生徒作品は誤字も含めてそのまま掲載している）。

Ｘ　私は、言葉とはものの名前だけではなく、何か動きなどを表現するものや国ごとにものの見方を変える為のものだと考えます。

　教科書では、「ギリシャ以来の伝統的な言葉の言語観によれば、言葉とは『ものの名前』です。」とギリシャ以来の言語観が少し書かれていますが、鈴木孝夫が書いた「ものとことば」では「名前がついているのは、ものだけではない。物体の動き、人間の動作に始まって、心の動きなどという、微妙なことにも、一々それを表すことばがある。」という感じで言葉はもの限定の名前では無く動作にも名前があるからです。

（…中略…）

　国ごとに分類すると考えたのは、教科書でも３人の文章でも書かれているように馬や犬など同じ動物でも日本語、英語、中国語で呼び方が変わるからです。このようなものは「恣意性」と呼ばれます。これは、丸山圭三郎が「その言語次第で現実の連続体がどのように不連続化されていくかというその区切り方自体に見られる恣意性、すなわち非自然性にほかなりません。」と述べています。

この文章では、教科書に述べる「ものの名前」という表現に対して、「言葉はもの限定の名前では無く動作にも名前がある」と述べている。しかし、教科書の「ものの名前」という言葉は、そもそも「物体の動き」や「人間の動作」「心の動き」等を全て含めた概念である。その点を読み違えており、結果とし

て「言葉はもの限定の名前では無く動作にも名前がある」と、従来通りの「言語はものの名前である」という考え方を繰り返すだけのものになってしまっている。

また後半の恣意性に言及をしている部分でも、「日本語、英語、中国語で呼び方が変わる」という音声と概念の対応の話題を展開していたかと思ったら、そのまま「現実の連続体がどのように不連続化されていくか」という分節化の話題に変わっており、説明が一貫していない。この点、十分な読み取りがなされていないと判断できる。以上二点により、この文章はＣと評価した。

次にＢ評価作品を載せる（なお引用する生徒作品は誤字も含めてそのまま掲載している）。

Ｙ　（…略…）ではなぜ言語があると物や概念を存在させることができるのでしょうか。

その理由は、言語には恣意性があるからです。

言語の恣意性とは、記号内部の文字や音声とイメージや概念の結びつきに必然性がないことです。例えば日本語では「イヌ」で、中国語では「狗」で、英語で「dog」、フランス語で「Chien」と、呼ばれています。これが何を意味しているかというと、他の国の人の言語でイヌという存在を文字や声で発音してもイヌという存在は変わらないということです。

恣意性にはもう一つの特徴があります。これは丸山によると「分節の仕方そのものに見出される非自然性のこと」と言っています。例えば、英語では水は「water」といって言い方が一つしかなくあったかい水も「hot water」と前に hot がつくだけです。しかし、日本語では水以外にも冷たい水を「冷水」と言ったりあったかい水を「温水」と言ったりします。このように同じ物を表す言葉でも言語によってその物の価値が異なってきます。

この二つの恣意性を踏まえた結論は、言語によって物の存在や価値観が決定されることで物や概念が生まれ様々な国の言語によって形作られています。

この文章は「恣意性」のもつ二つの側面、すなわち、音・文字／概念の対応関係の問題と、分節化の問題とを、両方とも指摘することができている。そしてそうした恣意性を根拠として、「言語があると物や概念を存在させることができる」という内容を主張している。教科書から読み取った内容を中心として、それを参考文献で読み取った内容で言い換えたり、補足したりすることができている。挙げられた具体例は、本文中の例を改変したものであり、結果として分節化の例としては不適切になってしまっている。本来であれば「water」という言葉の持つ内容と、「水」という言葉が持つ内容の差について考えるべきであったと思われる。ただ、全体を通して、恣意性や分節化という重要な部分での読み取りはできていると判断し、Ｂと評価した。

最後にＡ評価作品を載せる（なお引用する生徒作品は誤字も含めてそのまま掲載している）。

Ｚ　言語を考えるうえで、三つのことが大切だと思います。

まず、言語は、何物にも分節を与えるものであるということです。教科書では「黒い空を背景にして錯乱する無数の星の間のどこに切れ目を入れて、どの星とどの星を結ぶかは、それを見る人の自由です。」と星座の見方で分節の例を作っています。…略…。

次に言語には恣意性が備わっていると考えられます。田中は「指される概念とオトとの結びつきが自由である」と述べています。…略…。

また、田中の文章では、言語を「まだもの心つかぬうちに、無理やり、社会の暴力によっておぼえさせられたにすぎない」と述べ、言語を社会的事実として把握しています。これは言語が誕生の

瞬間から人間を縛り付けているものであり、不合理だからといって、取り換えることができないということです。例えば、犬をイヌと呼ぶのはみんな同じように覚えさせられるけど、自分だけ音が嫌だからと犬をネコと呼ぶことはできないということです。…略…。

この文章では、教科書に述べられている分節化の内容を参考文献と対応させて述べるだけでなく、教科書には書かれていない「社会的事実としての言語＝言語の必然性（強制性）」についても言及をすることができている。教科書から読み取った内容を踏まえるだけでなく、他の参考文献を根拠に、全く別の観点から考察を加えることができており、複数の観点があると判断し、Ａと評価した。

なお文章としての読みやすさや、言葉遣いの適切さという観点から読むと、Ｚの文章よりもＹの文章の方が評価は高くなる。しかし、今回の単元はあくまで「読むこと」の単元であり、文章の巧拙ではなく、読み取りの内容がどれだけ反映されているかという観点で評価をするため、上述のような評価となった。

７　研究の成果と課題

(1) 問題意識と成果

今回の研究において、授業者は「自分の読んだ文章を、読んだことがない他の生徒に説明する＝自分の読みが他の生徒の理解に直結する」という状況を生み出すことで、他の生徒への責任が生まれ、主体的な読みにつながることを期待して、授業を計画した。また複数の文章への理解を得た後に、意見文をまとめさせることで、それぞれの文章を理解し、考えを整理しようとする意欲が喚起できると考えた。

この点については想定していた通り、クラス全体への発表が必要なことから、熱心に事前準備をする様子が見られた。また他の生徒の発表についても、記録を取りながら聞く姿勢が見られた。ただ少人数での活動であったこともあり、質疑応答についてはあまり活発にならなかった。

こうした活動をするときに重要となるのが、教材文の選定である。「自分の読んだ文章を、読んだことがない生徒に説明する」という活動では、相互の文章の関係性が重要となる。全く異なる文章の読み比べとなると、他の生徒が読んだ文章について、全てが初めての内容になり、相互の理解が困難になると考えられる。一方で、同じような内容であれば、お互いの発表を聞く意識が薄くなってしまう。共通した内容をもちながら、論じ方が少し異なる教材文を用いることが重要であると考えた。

今回選定した文書は、どれもソシュール言語論に基づきながら、少しずつ見方を変えて論じている。そのため理解度を測るときには、同じ評価規準を用いることができる一方で、比較をするときには、その見方の違いを問題にできると考えた。

しかし、実際は抽象的な内容を理解することが精一杯であり、お互いの論じ方の違いまで踏み込むことはできなかった。ただ、抽象的な内容だからこそ、説明の仕方や具体例の挙げ方の違いによって、お互いの理解が補完できるという側面もあった。当初の目論見とは異なる形であったが、抽象的な内容について複数の文章を読ませることで、理解を深化させるというのも一つの方法であると感じた。

(2) 今後の課題

今回の反省として最も大きいのが、授業者が想定していたよりも抽象的な語句に関する理解が十分でなかったことが挙げられる。抽象的な語句について自分なりに説明する練習は何度もしていたつもりだったが、文章の中で複数出てきたときに、それらを同時に処理することはやはり難しかったように感じた。また、今回の教材文が言語論であるために、具体例を自分で考えることが難しいことも、より読解を困難にしていたと思われる。

こうした負担を軽減するためにも、学習者の理解度に応じて「辞書的な意味を確認する語句」「本文中の語句を用いて抽象的な説明をする語句」「具体例を自分で考えさせる語句」等、理解の目安を示すといった工夫が必要であると感じた。

また、より大きな枠組みでの反省としては、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成、共有」という学習過程の連続性について、検討が十分でなかったことが挙げられる。今回の研究は、複数の文章を主体的に読み取り、言語に関する文章を「精査・解釈」することに主眼がある。しかし、その前提として、それぞれの文章について「構造と内容の把握」が正しく行えている必要がある。そのため、活動の中で「構造と内容の把握」についての適切なフィードバックがないと、十分な「精査・解釈」に至らないと考えられる。今回は、質疑応答に授業者も加わることで、「構造と内容の把握」に一定の正確性を求めたが、理想を言えば、それが活動の中で生徒相互に確認できる環境が整うことが望ましい。そうしたフィードバックの方法、仕掛けを考えていく必要があると思う。